

# 検査室の紹介

宮崎生協病院 検査科 主任 / 柳田 崇至



## ◎ 臨床検査技師の仕事

臨床検査技師は医師の指示のもとで、病気の診断や治療に必要な検査を行い、医師に検査結果を提供する専門職です。以前は臨床検査技師という職種を知らない方が多かったのですが、2020年からの新型コロナウイルス感染症により、連日PCR検査数が報告されていた事をきっかけに知名度が上がりました。最近では、学生がインターネットで検索する職業1位に輝いた事もあります。仕事内容は大きく分けて、患者さんから採取した血液や尿などを検査する「検体検査」と、患者さん自身へ直接触れて検査する「生理検査」に分かれます。宮崎生協病院では以下のような検査を行っています。

- ①血液検査、尿一般検査、細菌検査、感染症検査、輸血検査
- ②超音波検査(腹部、心臓、血管、上皮、乳腺)
- ③心電図、負荷心電図、ホルター心電図
- ④心肺運動負荷試験、肺機能検査
- ⑤睡眠時無呼吸症候群検査(精密・簡易)



## ◎ 超音波検査について

超音波検査は、人の耳では聞くことのできない高い周波数の音波(超音波)を利用して行う検査です。超音波を発生させる器械(プローブ)をからだの表面に当てるだけで検査を行えるため、特に準備も必要なく、短時間で手軽に受けることができます。また被ばくの心配はなく、痛みなどを感じることもありません。当院では3台の機器を活用し、様々な領域の検査を行っています。超音波検査は安心して受けられる検査です。病気の早期発見の為に、定期的に検査されることをお勧めします。

- ①心臓…心臓の動きや構造、大きさ、壁の厚さ、心臓内の血流を観察します。
- ②腹部…腫瘍や結石、炎症の有無を確認します。
- ③頸動脈…首の血管の壁の厚さ等の状態を調べることで、動脈硬化の進行度合いを判定します。
- ④甲状腺…甲状腺の大きさや血流、腫瘍の有無を調べます。
- ⑤乳腺…乳房内部のしこりの有無や、乳管の変化を調べます。

# 私の好きな

# 本

宮崎生協病院  
内科医師 永友 英之

「なぜ働いていると本が読めなくなるのか」



(三宅 香帆 著)

「(仕事始めて)パズドラしかやる気しない」。  
3年前の映画「花束みたいな恋をした」の中で出てきた言葉です。麦(菅田将暉)と絹(有村架純)という二人の主人公は大学生のときに小説、マンガ、ゲームなどといった文化的趣味が合い、すぐに恋人になるのですが、就職して環境が変わり、二人の心が離れていきます。仕事に没頭するあまり、本を読んでも頭に入らなくなった麦は、絹に対してこう言い放つのです。

この本の著者の三宅も似たような経験をしています。1994年生まれの子供は子どもの頃から本が大好きで文学部まで出た文学少女。本を読み続けるため、好きな本を買い続けるために就職したはずだったのですが、1年も経たないうちに本を読めていない自分に気付いてしまいました。暇ができてYouTubeを見てしまい、これではダメだと感じる。結局、麦と違って三宅は本を読み続けるために会社をやめるというラディカルな(本読界隈では英雄的な)行動に出て、今は書評家として大人気なのですが、この本には、自分に本を読ませなかったものが何なのか、突き詰めてやる、という執念(怨念)のようなものを感じます。

三宅は、まず日本人の読書行動を歴史的に分析します。詳しくは本書に譲るとして、明治時代に始まった立身出世と絡めた読書行動、昭和初期の文学ブーム(円本というサブシステムがあった!)、戦後に司馬遼太郎はなぜ読まれたのか(『坂の上の雲』は懐メロ?)、90年代のスピリチュアルブーム、どれをとっても本好きにとっては興味深い話です。(ただ、本の歴史に興味があればそんなに惹かれなくてもいいです。そのときは読み飛ばしていいです。先に行ってください)。  
三宅は2000年に入ってからです。三宅が実際に生きている時代になり、それまでの章とはリアリティが違います。筆致が違います。たとえば、村上龍の『13歳のハローワーク』(2002年)について。これは、子どもに向けて、それぞれの好きなことに応じて、それに合う職業を紹介する職業事典のような本です。私は当時、いい本に見えたのですが、三宅は、この本が「好き」を重視する仕事を選ぶことを良しとする考えが基礎になっており、それは「幻想」だと切捨て捨てます(いろんな論拠を基に、論理的に切捨て捨てています)。仕事への過剰な意味づけや、「自己実現」という夢が、若者を長時間労働にのめり込ませてしまっ

たのだ。仕事以外で自己実現をするという考え方は背後に押しやられてしまったのだ、と考えます。  
紙幅もないので結論を急ぎますが、これは当時広がってきた新自由主義的考え方によるものが大きいと断じます。もちろん新自由主義というのは規制緩和、市場原理主義の重視などの経済原理ですが、労働に対しての価値観としては、「自分のキャリアは自己責任でつくっていく」というのが支配的です。そう考えることで、労働そのものが「自分探し」になっていく。  
そうなると、読書というものは(ビジネス書は別ですが)情報を手に入れるのにさまざまなノイズが紛れ込むので、効率が悪いと感じてくる。インターネットはノイズが除去された情報として効率よく摂取できる(ように見える)。こういったことなどから本が読めなくなってきたと分析します。もちろん三宅は、それでいいと思っていまません。本当の知識はノイズ込みのものではないでしょうかと書きます。  
そして処方箋も提示します。「(仕事に対する)全身全霊をやめませんか?」という精神論から、「自分と趣味の合う読書アカウントをSNSでフォローする」「iPadを買う、そして読書以外のアプリは入れない」「書店に行く」などの具体的な行動まで。もう、立ち読みでもいいので、書店に行っただけ一読下さい(15万部売れているので、どこの書店にも置いてあります)。そして気に入ったら買って下さい。どんな本を読みましょう!!